社会情報学研究，Vol. 15, 1-11, 2009

地域協働と担い手育成

－呉市Ｓ地区における地区まちづくり計画策定を事例に－

大　藤　文　夫*

Local Collaboration and Upbringing of the Subject

—The Process of Community Development Planning of “S”district in the City of Kure in an example—

Fumio OOTOU

Significance of the local collaboration is that the local administrative body of the intermediate range based on resident autonomy is filled up thereby. The problem of the local collaboration are making system to give this organization authority, and bringing up the activity to lead to the materialization of resident autonomy. In this article, I clarified about the latter, by case study to the process of community development planning of “S”district in the City of Kure. The following points mainly became clear. Primarily, growth of the subject is important for the resident autonomy. Second, workshop is an appropriate method for growth of the subject. Third, but, problem of workshop is the connection with a workshop and the reality. Therefore cooperation of community, company and administration is necessary. The local collaboration is necessary by all means in the days of maturity. Therefore, effort to promote maturity of the subject should be continued in various scenes.

Key Words（キーワード）

Local collaboration（地域協働），Local administrative body of the intermediate range（中間範囲の地域管理組織），Workshop（ワークショップ），Growth of the subject（主体の成熟），Community development（まちづくり）

1．はじめに

近年，市民協働とともに，地域協働という概念が用いられるようになっている．市民協働は旧来の行政主導のまちづくりに代わって，新たなまちづくり手法として多くの基礎自治体が標榜しているものである．その背景として，成長の時代を支えた行政主導のまちづくりの行き詰まりとともに，ボランティア元年に象徴される，市民公益活動の隆盛がある．またその理論的裏付けとして，公共概念の転換（新しい公共）が議論されてきた．

他方，地域協働はコミュニティ論の系譜，地方分権における地域内分権・小さな自治システム[1]に関わって議論されている．そこでは地域協働体[2]という用語も使われるようになっている．

地域協働で念頭におかれる地域は，中間の範囲である（例えば小学校区）．また組織の在り方としては，自治会・町内会を中心に据え，それに行政協力集団や各種アソシエーションが加わるという形態を取っている場合が多い[3]．仮にこれらの集団が協働への動機付けがあるとすれば，各集団の専門性と組織性，またニーズの布置とサービス提供主体の責任のとり方を考え，それぞれの範囲での適切な連携を考えることができる．そこに企業がかんでいく．また行政が下支えをしていく．あるいは行政がスケールメリットを活かせる事業

*広島文化学園大学　社会情報学部（ Faculty of Social information Science, Hiroshima Bunka Gakuen University）

を行っていく.このような役割分担が実現すれば,重層的コミュニティといった構成が描ける.地域協働の意義は,このような住民自治に基づく中間範囲の地域管理組織を充実させるところにある.便宜的に,いわゆる市民活動(テーマ型活動)の展開として市民協働を,また地域づくり(エリア型活動)の展開として地域協働の用語を振り分けることも出来ようが,いずれにせよ,協働が不可欠の方法であり,両方が現在の地域社会には必要であることはいうまでもない.

この地域協働を進めるためには,当面二つの課題があるだろう.一つは中間範囲の地域管理組織を権威づける制度設計である.例えば自治基本条例の中での位置づけ,法定の地域自治組織[4)],あるいは任意の自治組織としての位置づけといったことが行われている.二つめは,この中間組織が住民自治を実体化する活動を育てていくことである.問われ続けてきた課題であるが,住民がみんなに関わることを決めることができ,実行することができるという住民自治のまちづくりに向けて,住民の主体化を促していくことである.その場合,まちづくりのＰ→Ｄ→Ｓサイクルに住民が参加する中で,担い手としての成長(主体形成)を図ることも当然あり得る.その出発点がまちづくり計画である.本稿では第二の課題について,事例として呉市Ｓ地区の地区まちづくり計画策定を採り上げ,住民の主体形成の観点から検討する.

その際のポイントは,次の通りである.基礎自治体レベルの計画づくりにおいては,これまで市民(住民)参加,情報公開,地域情報化等,住民参加を阻む壁を取り除く工夫が凝らされてきた.しかしこれらはいずれも参加者の主体性(語ろうとする・聞こうとする意志,当事者であろうとする意志,またそれらの能力)を前提にした場合に効果があるものである.他方でこれまでの地域社会の状況は,住民の地域への関心が少ない,役員だけで頑張っている(役員の負担が大きい),後継者がいないといったように,いわゆる空洞化が指摘されるものであった.しかしそれは構造的な問題である.成長の時代では,サービスは行政がやってくれる,あるいは市場で買えばよかったわけで,そうであれば,地域社会でのつながりは必要なく,煩わしいだけである.こうして住民は地域社会への関心とつきあいの作法(能力)を失ったというわけである.こういった場合,いくら参加への環境づくり,制度上の工夫がなされても,実質的な参加の増大は難しい.全てがそうではないにせよ,少なからずこういった状況にあることを踏まえて,地域協働を進めるべきである.

このような状況で必要なことは,上述のように,計画づくりの中で,同時に担い手を育成することである.とくに関心を持っていない人たちへの働きかけ(普及・啓発と呼ばれる)とともに,既に何らかの気付き,興味・関心を持っている人たちに一歩前に出てもらう働きかけが必要である.近年,まちづくり計画策定の効果的な手法として,ワークショップがしばしば行われている.ワークショップの方法的特徴として,体験重視,意識化・気づき重視,段階重視といった点[5)]がある.しかしそれらは人が役割を取得し,成長していくときの基本的な要点であり,かつての地域社会にはそれらを備えた担い手を育成する仕組みがあった.そして都市化はこういった仕組みも壊したわけである.ワークショップは,現状において,新規に担い手育成の構造を創り出そうとする端緒的試みといえる.

以下,これらのポイントに従って,Ｓ地区のまちづくり計画策定を検討する.なおＳ地区のまちづくりはスタートを切ったばかりであり,現在進行中の取り組みであることを断っておきたい.

２.地区まちづくり計画の策定経過

(1) 呉市の市民協働の取り組み

まず呉市の市民協働の取り組みについて簡単に触れておきたい.呉市では,平成15年４月に「呉市市民協働推進条例」を施行,平成16年３月に「呉市市民協働推進基本計画」を策定し,市民協働推進の大枠を定めている.爾来,拠点施設の整備,組織・体制づくり,推進事業・制度づくりを

行ってきた．現在では，①生涯学習団体やボランティア団体・ＮＰＯなどのアソシエーション組織が行う市民活動の展開を図るものと，②地域単位で，自治会などの地縁組織を中心に展開を図るものという二つの面を持つようになっている．後者について，とくに平成20年３月に「ゆめづくり地域協働プログラム」を策定し，地域協働の取り組みを始めている．これは呉市の市民協働の新たな段階と位置づけられる．

現在市内を28地区に分け取り組んでいるが，この場合の地区とは，単位自治会より広く（従って自治会が連合した範囲となる），市より狭い範囲である．各地区ごとの人口数にはばらつきがあるが，これまでの合併などの歴史的経緯を踏まえた単位設定となっている．なおこの度合併した旧町は，旧町単位で一つの地区となっている．28地区はそれぞれ温度差があり，進捗状況も同じではない．取り組みが進んでいるところもあれば，スタートしたばかりというところもある．

この地域協働の要となる住民組織とされているのが「まちづくり委員会（協議会）」である（図１参照）．それは「自治会地区連合会，地区内の各種団体，NPO，ボランティア団体などで組織されている地域包括型の住民自治組織です．地域内の種々の目的別縦割り組織 (各種団体) を包括し，各地域内での団体間の協働・連携を図る役割を担うことが期待されています」[7]と性格規定されている．いわゆる地縁組織だけではなく，アソシエーションもまた構成組織として考えられている．しかしまちづくり組織としてはその地区を代表する面的な組織である．このまちづくり委員会 (協議会) が地区まちづくり計画を策定する組織であり，また「ゆめづくり地域交付金」（使途を限定しない地域予算制度）の受け皿となっている．

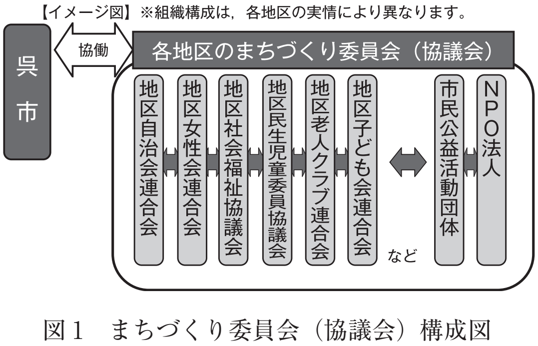

図１　まちづくり委員会（協議会）構成図
（呉市　市民協働推進ホームページ[6]）

(2) 地区まちづくり計画策定の経緯

Ｓ地区は呉市の中心市街地部にあって，映画のロケ地となった急な長い階段があるところである．急傾斜地と平地に別れており，平地にはマンションが建つなど新しい住民も入ってきているが，全体的には高齢化が進んでいる地区である．７つの自治会からなり，1,492世帯，人口2,963人（平成21年３月末現在）である．

Ｓ地区のまちづくり組織である「Ｓ地区まちづくり委員会」は平成19年５月に設立されている．出身団体は，自治会連合会，地区活動連絡協議会，氏子総代会，青少年補導員連絡協議会，社会福祉協議会，民生児童委員協議会，日赤十字奉仕団であり，地縁集団，行政協力集団を列挙した構成になっている．先述のゆめづくり地域協働プログラムを受け，平成21年２月のワークショップから計画づくりの作業に取り掛かっている．表１はそれらの内容をまとめたものである．

参加者募集に際しては地区まちづくり計画策定のためという目的を明確にし，公募（回覧板への募集チラシの折込）と個人的な勧誘（会長の声かけ）で行った．計画づくりは大きく分けると，地区の課題と宝について参加者の意識化を行った前半４回のワークショップと，それに基づき学習を深め，計画書づくりを行った後半４回の計画策定部会，及び３回の計画策定部会リーダー会議に分けられる．ワークショップには広島文化学園大学健康福祉学科 大藤研究室と，（特）呉こどもNPOセンターYYYが運営協力している．実参加者数は75人であった．４回のワークショップを通して，地区まちづくり計画の骨子となる地区の課題と宝が参加者に意識化されるようにプログラム化されている．各回のワークショップ開催の

表１　計画づくりの流れ

第１回ワークショップ Ｓ地区まちづくりワークショップ「こんなまちにしたいなあ」
日時：平成 21 年２月 14 日(土) 10:00 ～ 12:00　場所：小学校　参加人数：50 名(うち小学生４名，中学生６名) 内容：６グループに分かれ，Ｓ地区にあったらよいもの，ことを出し合い，交通整理をして発表する． 狙い：地区の課題を導き出す．
第２回ワークショップ Ｓ地区まちづくりワークショップ「実際に歩こう！」
日時：平成 21 年２月 28 日(土) 10:00 ～ 12:00　場所：地区内　参加人数：54 名 内容：３グループ（３コース）に分かれ，まち歩きを行う．途中説明を受けたり，後日のマップづくり用に記録，写真を撮る．終了後は一緒に食事（カレー）をする． 狙い：地区のよいところを発見する．まち歩きで五感を使って感じる．
第３回ワークショップ Ｓ地区まちづくりワークショップ「地図を作ろう！」
日時：平成 21 年３月 14 日(土) 10:00 ～ 12:00　場所：小学校　参加人数：約 40 名 内容：３グループに分かれ，前回のワークショップで作成した記録と撮影した写真を使い，マップを作成． 狙い：地区のお宝マップをつくる．
第４回ワークショップ Ｓ地区まちづくりワークショップ「いよいよＳ地区の未来予想図を創り始めるぞ！！」
日時：平成 21 年３月 28 日(土) 10:00 ～ 12:00　場所：小学校　参加人数：38 名 内容:6 グループに別れ, 横軸に「あったらいいな (課題) と「自慢 (宝)」, 縦軸に「もの (ハード)」と「すること (ソフト)」を書き，４つの象限にこれまでのワークショップで出てきたものを分類．各象限で似たもの同士をグループ化．さらにそれらをまとめて，いくつかのまちづくりのスローガンを抽出．最後に発表． 狙い：まちづくり計画の核となる地区の課題と宝を交通整理する．
第１回計画策定部会
日時：平成 21 年６月６日(土) 10:00 ～ 12:00　場所：小学校　参加人数 18 名 内容：振興方針のグループリーダーと計画策定部会長を決定．ワークショップで出された各グループの案を協議し，計画の振興方針を決定．振興方針ごとの具体的な活動方針を決定．
第２回計画策定部会
日時：平成 21 年６月 20 日（土）10:00 ～ 12:00　場所：小学校　参加人数 19 名 内容：実施計画の策定（事業ごとの事業内容，実施主体，タイムスケジュール検討）．
第３回計画策定部会
日時：平成 21 年７月 11 日(土) 10:00 ～ 12:00　場所：小学校　参加人数 19 名 内容：実施計画（案）の見直し（第２回計画策定部会で協議した内容を踏まえ，リーダー会議で検討した各事業内容，実施主体，タイムスケジュールについて再検討）．
第４回計画策定部会
日時：平成 21 年７月 18(土) 10:00 ～ 12:00　場所：小学校　参加人数 19 名 内容：スローガンの検討・決定，計画書の内容精査，今後の継続について検討．

（「Ｓ地区まちづくり計画」より抜粋，加筆）

前には関係者で運営打ち合わせを行っている．また４回ともアイスブレイクとして，冒頭に自己紹介ゲームを行った．

後半の計画策定部会はワークショップ参加者からメンバーを募り，ワークショップの成果を整理し，計画書づくりを行った．

３．計画策定の意義と課題

(1) まちづくりワークショップの意義

次に冒頭に述べたポイントの観点から，S地区まちづくり計画策定の取り組みを検討する．図2に地域社会への様々な関わり方を示してある．

地域社会に興味・関心がない人．他の人がやってくれる，行政がやってくれると思っている人．逆に関心があっても時間が取れない，一歩が踏み出せない人もいる．地域活動への参加者が少ない，リーダーの負担が多いという課題は，協力者の部分が薄くなっていることに起因する．住民の全てが協力者になるというのは理想論であるが，相応に協力者がいないと，まちづくりは困難である．ワークショップの狙いは，これらの興味・関心を持った層を協力者へと育てるところにあると考えた方が良い．別の層にはまた別の働きかけをすべきである．

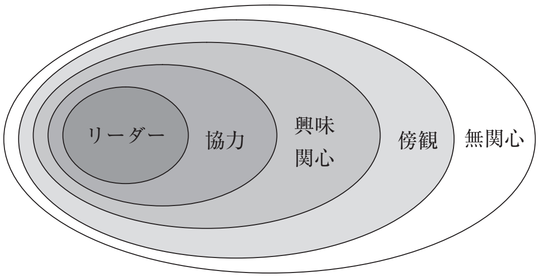

図2　地域社会への関わり方

実際にS地区では，参加者募集を公募と個人的な勧誘で行った．つまり，「いつでも席は空けてある」状態で募集した．また各回のワークショップの内容についても広報をした．結果として，大学関係者，YYY関係者，市役所担当職員を除けば，地域住民の参加者は56人であった．この人たちが都合がついたリーダー，協力者，まちに興味・関心を持っている人たちである．住民の数からすれば，一部である．しかしこれが現状であるし，むしろ出発点である．ここから担い手が育っていけば，取り組みは成功である．

図3は一般的なワークショップの位置づけを示したものである．ワークショップ空間は，いわば現実世界を括弧に入れた，仮想空間である．ワークショップ空間の特徴として以下の点がある．

ワークショップは対面的コミュニケーションの一形態である．まず「少人数」であることで，議論の双方向性が保証されやすくなる．しかし現実の世界での役割をそのまま持ち込むと，自由な意見が出にくくなる可能性がある．そこで「肩書きをはずす」ためにアイスブレイクを行う．大抵のアイスブレイクは子供っぽい遊びのゲームである．現実の世界ではそのようなことはしないと大

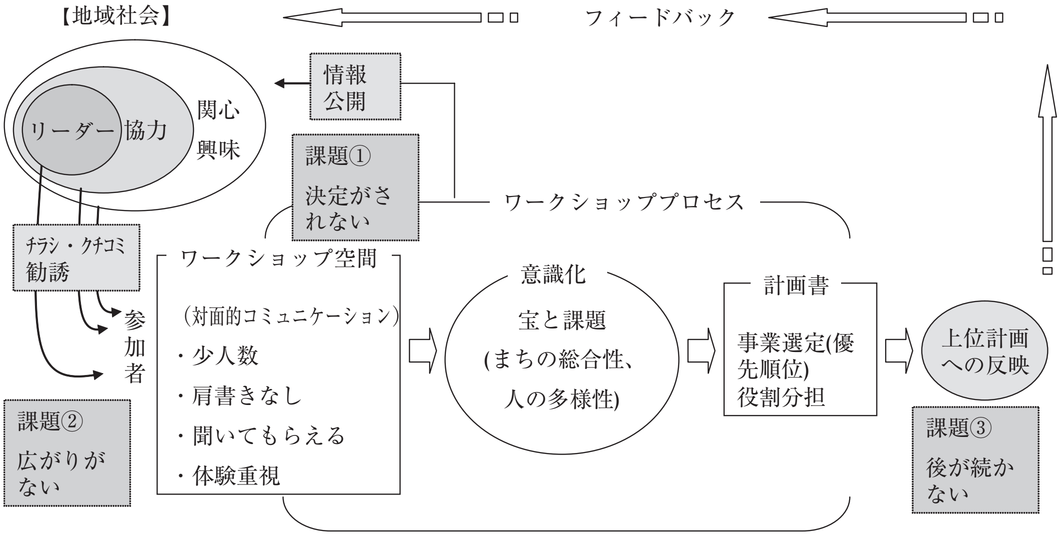

図3　ワークショップの位置づけ

人は感じるかもしれないが，その場では非日常空間に入るという儀礼としての側面があり，それを行うことで心が開かれる．同じゲームをすることによって，その場の仲間という関係ができる．こうして権力からの自由が得られ，結果として「聞いてもらえる」，役割を認めてもらえるといった存在，役割の承認が得られる．

また「体験重視」については，部屋の中でも，例えばＫＪ法といった手作業を通して議論を進めることもあるが，何よりも大きいのはまち歩きといった作業である．住民にとってまちが点や線になり，面として使うことがなくなったという状況で，五感を使ってまちを理解するのに適した方法である. まちには施設, それを使っての行動, 行事, そしてそれを行う人々がいる．これらの多様なモノ，コト，ヒトの関わりを感じることで，まちのリアリティを感じることができる．都市的生活様式はこのような感覚を我々から喪失させたが，それをわざわざ歩くことで再度意識化しようというのがまち歩きである．

こういった特質が参加者の意識化をもたらす．意識化されるのは総じてまちの姿であるが，同時に一連の作業の中で，まちの人との付き合い方にも気づくことになる．この気づきはつながりを築いていく契機になる．

(2) ワークショップ参加者の感想

では実際にワークショップは参加者の意識化をもたらしたのだろうか．各回のワークショップでは自由記述で参加者の感想を聞いている．感想は全体的にほとんどが肯定的なものであった. 以下，上述のワークショップの特徴に関わる感想を抜粋してみる．

１回目はまちの課題を出し合い, まとめた. ワークショップが普段出会わない人たちとの出会いの場になったことが示されている．肩書きをはずすことも上手くいき, 自由な意見交換が出来ている．室内での作業であったが，意見交換だけでも多くの気付きがもたらされている. また満足度も高く，今後も関わろうとする意欲も高い．そして何よりもワークショップを通して，地域への関心が点や線になってしまっていることの気づきがもたらされている（表２参照）．

表２　１回目の感想（抜粋）

①作業について 「一人では思いつかないこともあり・・」,「子供の発想はすごい」,「中学生の積極的発言があり‥」,「紙にかいてみると，たくさんあって」,「幅広い年齢層で，考える視点が違い勉強になりました」,「これほど意見がたくさん出て・・」,「いろいろな人と顔見知りになれた」,「ふだん話したことのない方の，いろんな声がきけて・・」.
②満足感・意欲 「和気あいあいと楽しく・・」,「楽しかった」,「よかった」,「頑張りたい」,「かかわっていきたい」,「もっとよいまちにしていきたい」,「よりよいまちづくりに努めたい」,「皆といっしょによりよいまちづくりに努めたい」,「意見を出し合いながら明るい楽しいまちづくりをしていきたい」.
③普段の生活の振り返り・展望 「普段，地区のことを考える機会がなく・・」,「地域を見直すいいきっかけになった」,「地区のことを改めて知りました」,「近隣の方はもちろんのこと，近所の小さい子供たちとも今回のような話をしたことがなかった」,「呉に住んでいるのに知らないことがいっぱいで・・」,「私たちの住んでいるまちのことを改めて考えさせられる良い機会でした」,「私たちが住んでいるまちについて考える機会が少なかった」.

２回目はまち歩きである．やはりまち歩きがリアリティを得る上で，効果的であることがうかがえる．普段は歩かない所を歩いた，あるいは歩いていたのに気づかない所があった．こういったことは，みんなで歩いたことでもたらされた気づきである．まちが点や線になっていた証拠であり，まちが面であることを改めて気づくわけである（表３参照）．

表3　2回目の感想（抜粋）

①作業について 「歩いてみるだけで，それなりの価値があると思った」，「しんどかったですが，見るけしきはとってもきれいで・・」，「昔の地区のことについてもっと知ることができてとてもよかった」，「老人にやさしいまちと感じた」，「「こんな所あったんだー」といろいろな発見がありました」，「いろいろな歴史がいたるところにあって・・」，「まるで別世界のようなところもあった」，「美しい風景をたくさん見ることができました」
②満足感・意欲 「楽しかった」，「しんどかった」，「いい経験ができました」，「有益な一日を過ごしました」，「もう少し深く調べてみたら良い」，「これからもまちづくりについて考えていきたい」，「次回もぜひ参加させて頂きたく」，「まちづくりに少しでも役に立てば・・」
③普段の生活の振り返り・展望 「思っていたよりはるかにいろいろな店，建物，施設が存在する」，「変わらないまち並み，改めて見直してみると，捨てたもんじゃないと痛感しました」，「このまちに住んで後世に伝えておく必要をも感じました」，「子供たちにも自分のまちをもっと知ってもらいたい」，「いつも通る道ですが，再発見できる良い機会でした」，「いつも歩いているところでも，みなさんと一緒に歩くと見えないところや知らないことが，たくさんありました」，「なにげなく生活しているまちにこんなにもたくさんの新たな発見がある」，「なかなかゆっくりまわりをみながら歩く事がなかった」，「今度は子どもや妻に案内してみたい」．「今日ほどまちの事をくわしく知る事はありませんでした」．

3回目はマップをつくりながら，まち歩きで得たリアリティを互いに共有化する作業である．マップをつくる作業が，リアリティを再確認する事になっているのがうかがえる．そして外部の人の眼が自らの地域を見つめ直させている事も確認できる．また発表の際に，歴史の説明があったので，そのことの評価も高い．さらにワークショップでの気づきをもっと広めたいという感想も出ている．なお満足度は高いが，同時にこれからの作業の方向への不安も出てきている（表4参照）．

表4　3回目の感想（抜粋）

①作業について 「地図にしてみると昔のことや今のこともとても良く分かりました」，「昔の話が聞けてよかったです」，「どのグループも分かりやすい地図を書いていた」，「地図をつくってみると改めていろいろなところに行ったなあ・・・と思った」，「このまちの歴史がこんなにあることを再認識しました」，「平常住みなれたまち，これを期に改めて見直してみると，感深いものが感じられます」，「よそから来た人間が目をつけるところと，この地域に住んでいる人とでは，目をつけるところがだいぶちがって・・」
②満足感・意欲 「よかった」，「次回が楽しみ」，「もっと地区のことを知りたい」，「勉強になりました」，「自分の中にも少しずつ愛着がわいてきました」，「これからの方向が分らない」，「今後の方向をみきわめたい」
③普段の生活の振り返り・展望 「住んでいるだけでは，自分のまちを知っていることにはならないとつくづく感じました」，「子どもたち，若者たち，子育て世代のおとなたちに，ぜひきいてほしいお話でした」．

4回目は，これまでの作業のまとめ，地域の宝と課題の総合的な交通整理である．ワークショップの最終回であったが，これからのまちづくりの展望が見えてきたことの指摘が多くあった．今回のワークショップの総合評価は高かったと考えて良いだろう（表5参照）．

表5　4回目の感想（抜粋）

①作業について 「しらなかったものがいろいろわかって・・」，「ヤングパワーの知恵をたのもしく思います」，「スローガンを考えるのがたのしかった」，「回を重ねるごとにまとまりがでてきたように感じます」，「まちづくりの計画が出来る過程が見えて，参考になりました．また，地区の宝の発見をできてよかったと思います」，「すばらしいキャッチフレーズが出ていました」，「住んでいる皆さんのまちづくりに対する色々な思いを知ることができた」．

②満足感・意欲
「楽しい気持ちで参加できました」,「住民の一人として今後共頑張って行きます」,「有意義な時間を過ごさせて頂き・・」,「だんだん楽しくなりました」.

③普段の生活の振り返り・展望
「まちづくりの手掛かりが出来ました」,「10年後のまちがこんなのになればいいです」,「ボランティアもすこしずつ参加出来たらよい」,「今まであったものが必要があるかないかというだけでなく,そのものがある,あるいはあったという事がものすごく大事なのだ」,「ムダ・不要と考えていたもの・場所でも,改めて考えると非常に良いし,大切なものであることを再認識しました.これらを活かすマンパワーが必要だ」,「まちづくり計画は,みんなで汗を流すという視点を重視してもらいたい」,「一人でも多くの地域社会の人が参加でき,もりあがるまち.一人でも多くの方が趣味を通して生きがいがもてる人生の応援が出来る明るいまちづくりに」.

以上4回分の感想をみると,ワークショップという出会いの場が参加者の意識化を促す事になったのがうかがわれる.意識化されたものは,まちの歴史(過去・将来),まちの空間(モノ,ヒト,コト),つまり,まちそのものではないだろうか.上述のように,都市化がもたらした帰結は,地域社会の構成員の個別化,互いに他人としての関係,そして行政に対するお任せ民主主義(観客民主主義)であった.それに対し,ワークショップ空間は,共同に利用する空間としてのまち,そのまちを利用する友人,隣人としての互い,そして互いが力を合わせることの効果を意識化させる.これは何も特別なことではなく,通常のこととしてかつての地域社会にはあったことであろう.ワークショップが新規につくりだすのは,地域社会の構成員としての通常の心構えではないだろうか.

またそれとともに,地域社会の構成員としての本来的な心構えもつくりだすのではないだろうか.挨拶から始まる人間関係,互いを受け入れ・認め合い,役割を取得していくこと,こういったことが実社会の権力を括弧に入れ,つくられていく.

なおワークショップの運営そのものについての意見はなかったが,「これが本当のまちづくりにつながってほしい」,「5回目以降を期待しています」,「広く意見を求めるためにも住民に公表する,数人以上のグループをさがし出す作業も大切」といった感想があった.これらは今後の展開に関する指摘といえよう.

(3) 今後の課題

このように,ワークショップに効果があることが示されたが,他方で,一般にワークショップの問題点として,①決定がされない,②広がりがない,③後が続かないといったことが指摘されている[8)](図3参照).上述のように,今回のワークショップでも②,③に関することは指摘されていた.また①も今回のワークショップに当てはまる.しかしそれはワークショップの内在的な問題というより,むしろワークショップ空間と現実とのつなぎが上手く整理されていないことに起因する.

課題①については,ワークショップの中で何らかの決定がされることは当然あるが,それを地域社会の決定とするかどうかは別問題である.実際にワークショップ参加者は,住民の一部であるので,むしろどうやって地域社会の決定まで持っていくかをあらかじめ決めておくべきである.これはまちづくり組織の決議機関はどうあるのかという問題になる.

課題②については,せっかくのワークショップの試みは,地域生活の中で活かされるべきである.そのためにはワークショップ参加者を増やすための呼びかけの工夫,ワークショップ内容の住民への情報提供,そして参加者がいわばファシリテーターとして日常生活の中でワークショップ空間を作り出していくこと,あらかじめこういった点を考えておくことも大切である.これもまちづくり組織が各組織をどれだけ組織化しているか,また組織間で連携できるかという問題である.

課題③については,政策決定(例えば基礎自治体の総合計画への反映)とどう繋がるのかという問題である.せっかく時間をかけてつくった計画

であっても，それが「聞きおく」という扱いを受ければ，住民の失望感は大きい．上位計画へのつなぎも大事な問題である．ここでは地域で政策を総合調整するという機能が求められている．また地域協働であるので，事業も協働を意識して行われるべきである．実施計画には誰が，何を行うのかが書かれるはずである．住民はこれをするが，行政はこれをするといった役割分担も明記されるべきである．これもまちづくり組織が行政とどれだけ連携できているかという問題である．こういった現実世界とのつなぎが設計されている場合に，ワークショップの批判力は生きてくる．

結局，課題はワークショップのその後，つまりワークショップで開かれる端緒を，どう組織的に展開し，担い手の成長につなげていくかということである．

4．中間組織の充実に向けて

ワークショップの今後は，中間組織を充実させる方向で展開する他ない．図４はＳ地区まちづくり計画の体系図である．今回の一連の作業の成果物であるが，今後は実施・評価の段階になる．体系図からもうかがえるように，福祉（高齢者，子育て），インフラ整備，安心・安全，健康づくり，世代間交流，観光といった各分野のまちづくりが念頭に置かれている．今後はそれらの実施に当たって，単位自治会，行政協力委員，アソシエーション，行政とどう役割分担をして進めていくのかを詰めることが大事である．実施，そして評価もまた成長の機会である．

実施，評価の過程の中で作られていくことが期待される，各主体の像を描いてみよう．住民は本来の住民になることである．隣人，友人と共にまちに暮らす事を認め，地域社会の権利と義務を自覚し，当事者としての作法（関わり方）を身につけた住民である．まずは自ら事業に参加することであり，さらには周りの人を誘っていくことである．

地域の役職者は自ら汗を流すリーダーになることである．役職者も現状では，いわば孤立状態である．タテワリの地域活動では活動をしている者同士が出会うことが少ないかもしれない．しかし今回のワークショップの第一の成果は，場があれば，相応の担い手に出会うという気づきであろう．そこで汗を流すことで，リーダーとして認められる．一緒に汗を流す仲間がいるという実感は，リーダー自身の後押しになる．

そして住民，役職者両者にとっての課題は，地域社会の中に役職者を再生産する構造をつくり上げることである．現状の役職者は高齢化が進んでおり，後継者難という課題がある．ワークショップに限らず，各種事業を行う中で後継者発掘・育成が試みられて良い．

行政職員は，権威型職員，サーバント型職員から，協働型職員に転換することである．呉市では既に地区担当制が取られている．そこでまちづくり委員会の事務局担当として機能することが期待される．また今回のまちづくり計画の中では，ハード な環境整備面で大きな課題が示されている．この部分は住民の工夫で対応できるものではなく，まさに行政としてのインフラ整備が期待されるところである．また次期総合計画への反映も求められる．

さらにアソシエーションとの連携については，現状では明確な像は描けないが，まちづくりが深化する中で，自ずと工夫されていくであろう．今後はワークショップに限らず，まちづくりのサイクルの中でつながりの形成，担い手の発掘・育成が図られよう．

5．おわりに

地域協働は中間範囲の地域管理組織の充実を目指している．そしてそれを行おうとすれば，旧来の主体の在り方は変化せざるを得ない．担い手育成は，住民側，行政側双方に必要である．現在でも，担い手育成の研修会が多々行われている．しかし注意すべきは，点としての担い手を育成するのではなく，担い手を再生産する構造を地域社会の中につくることである．

みんなが愛せる理想のまちへ　～Let's try together !!～

振興方針	活動方針	活動内容（事業名）
ふれ愛 たすけ愛 happyな町へ	各種行事の情報を集めて広報活動を行います。	1 アンケート調査を行う 2 高齢者等の見守り体制を整備する 3 高齢者の外出促進運動を行う 4 地域の人が小・中学生に授業を行う 5 健康づくり運動を行う 6 人権教育・啓発推進協議会講演会
みんなでつくろう！ 手作りの町へ	地域の人が集まれる活動拠点を整備します。	1 町内一斉清掃を行う 2 地区の生活道を整備する 3 道路等を拡幅する 4 手動式ポンプを設置する 5 活動拠点の整備を行う 6 コミュニティ道路の環境整備を行う 7 河川敷の清掃を行う
みんながつながる ほっと安心な町へ	防災・防犯のための活動を行います。また健康づくりにも取り組みます。	1 防犯灯を設置する 2 安全マップを作成する 3 標識を見えやすくする 4 地域内の各種行事に参加する 5 いのしし出没対策を行う 6 災害避難時の対応等について，検討・提案する 7 町民運動会，ソフトボール大会 8 ウォーキング大会 9 健康教室・運動教室 10 体力測定教室 11 健康講演会 12 交通安全指導（1のつく日に行う） 13 登下校時に地域の子ども達を見守る活動 14 防犯パトロール活動
ほめる しかる これぞ愛 大人と子どもの交流の町へ	テーマを決めて小学校の図書室等に集い，交流を行います。	1 あいさつ運動（1のつく日）を推進する 2 敬老会の見直しを行う 3 学生と他世代の交流の場を設ける 4 子どもが主役のイベントを開催する 5 子ども祭り（5月5日に小学校で開催する） 6 秋祭り（大歳神社） 7 七夕まつり 8 敬老会 9 児童館クラブ行事 10 児童館，地域活動連絡協議会主催行事
Ｗｅｌｃｏｍｅ！歴史再発見 階段の町へ	地区の歴史を若い世代へ語り継ぎ，地域の宝を残していきます。そして我が地区を地域外，市外へアピールしていきます。	1 地域のお宝マップを作成する 2 歴史再発見ウォークを行う 3 地区の昔話，語り部の会を実施する ボランティアガイドを養成する 4 地域のお宝の維持保存活動を行う

図4 地区まちづくり計画体系図（「S地区まちづくり計画」より抜粋，加筆）

無関心な人にも，主観的にはどうあれ，客観的には共同性の中で生活していることを理解してもらう．傍観している人には，自分も加われば，結局，自分にとって利益があること．また興味・関

心のある人には事業に参加してもらうこと．そしてリーダーには一緒に汗をながしてもらって，仲間がいることを実感してもらうこと．こういったことが担い手育成につながる．

人の地域への関わりは市場原理では決まらない．かつての地域社会では，ある時点での貢献は，やがては返礼があるという見込みがあった（ユイ等）．このような一般的互酬性は，市場における他人同士の交換関係では生まれてこない．それはかつての話といわれるかもしれないが，現在でも，「地域活動は損得ではない」という役職者がいる．確かにそうなのではないだろうか．現在でも地域活動は信頼関係，支え合いが根本原理ではないだろうか．

またかつての地域社会には共同意識があった．そして現在の都市社会でも，コモンズの利用・管理に関して住民が定め，従うべきルールがある．譲り合うこと，フリーライダーにならないこと，こういったことも現在の地域活動の根本原理ではないだろうか．そしてこういった心構えは地域社会の事業の中でつくられる．つまり担い手を育成するのは地域社会の事業を通して行うことが最も自然である．

本稿では地区まちづくり計画策定を，担い手育成の観点から考察した．ワークショップはその端緒として有効であった．そして今後の展開を考えるとき，ワークショップの方法的特徴を活かす形で，まちづくり事業を進める中で担い手の成長を図ることが大事である．目指すのは地域社会の再生である．

付　記

本研究は実際に地区まちづくり計画の策定に参加することを通して行ったものである．筆者も，また協力してくれた学生も，いわばアクションリサーチとしての関わり方をしたつもりである．その意味で計画内容について相応の責任があり，今後も地区まちづくりの進展に関わりを持ち続けたいと思っている．また何よりも，まちづくりは人づくりであることを実感できたことは貴重な経験であった．計画づくりへの参加を認めて頂いた委員会会長，地域の皆さん，そして呉市の職員の方々に深く感謝したい．

注

1) 群馬県での動きについては，大宮登，2006，地域再生に関する一考察－「小さな自治」の理念と実践－，地域政策研究，第８巻　第３号，高崎経済大学地域政策学会，pp.89–101．を参照．また広島県での動きについては，向谷敦志，2005，新しい住民自治次システムの構築に向けて，季刊　中国総研，中国地方総合研究センター，pp. 11–16. を参照．

2) 新しいコミュニティのあり方に関する研究会，2009，新しいコミュニティのあり方に関する研究会報告書．

3) 広島県内に限れば，同様の構成は福山市，三原市，竹原市，東広島市，三次市，庄原市，安芸高田市，廿日市市などがある．

4) 山崎丈夫，2008，地域自治組織の到達段階とコミュニティ政策－地域分権論序説－，コミュニティ政策学部紀要，第 11 号，愛知学泉大学コミュニティ政策学部，pp. 4–6.

5) 意識化の重要性については，木下勇，2008，ワークショップ　住民主体のまちづくりへの方法論，学芸出版社，p. 33. を参照．段階重視については大西律子，富澤浩樹，2007，市民のためのまちづくり学習プログラムの基本設計に関する研究，目白大学総合科学研究，３号，目白大学，pp. 139–152．を参照．

6) 呉市役所ホームページ，http://www.city.kure.lg.jp/~siminsei/kakutiki-machidukuriiinnkai/chiikimachidukuri21.html

7) 同上．

8) 武内俊樹，大谷英人，2002，市町村総合計画策定過程における「まちづくりワークショップ」の活用と展開可能性：計画策定プロセスにおけるパートナーシップの確立に向けて，日本建築学会四国支部研究報告集 (2)，日本建築学会，pp. 49–50.